巻頭発言

ファミリーとフィロソフィー
－業界全体で再構築を！－

高知工科大学 経済・マネジメント学群　教授　渡邊（わたなべ）　法美（つねみ）

ある橋梁下部工事の現場で，30代の型枠工世話役の方が，「コンクリートの圧に負けないように」と，各ボルトの締まり具合を一人黙々と念入りに確認されている姿に感銘を受けた。その夜頂いた返信には，こう綴られていた。「半分くらいは自己満足の世界で仕事しているようなもんでしたが，渡邊さんからのお言葉をいただき，誰かの為のものづくりになっているんだなと，もう一度自分の仕事の大事さを感じることができました。」

日本の建設構造物は，このような技能者の方々の献身的な努力によっても創られ守られている。技能工の仕事の尊さを改めて実感するとともに，この仕事の魅力をさらに高め，世に発信していきたいと思った。

スイスの地方都市で，従業員が約30名，300名，2,700名と規模の異なる三つの建設会社の技術者・経営者の方に，経営と下請について伺ったことがある。三社は，自社で相当な数の労働者と建設機械を保有している「自前施工」の会社である。三社を特徴づける共通のキーワードが「ファミリー」と「フィロソフィー」であった。

当初私は，この「ファミリー」と「フィロソフィー」の言葉の意味を理解することができなかった。しかし，三社の本社があるベルン州の技能工養成校と同州建設業連盟本部を訪問・見学して，この言葉の持つ意味が分かったような気がした。各州の建設業連盟の最も重要な役割の一つは，技能工の養成，すなわち，技能工養成校の運営と技能工賃金（月当たりではない。時間当たり！）原案の作成と議会への提案・働きかけである。これらの建設会社は，就労を希望する若者を「見習い工」として仮採用し，養成校に通わせながら，多能工としての資格を取らせ，「これは」と思う者を正社員として採用する。次の職位であるポリアー（日本では，実質的に現場代理人に相当）の資格もまた，養成校で取得することが求められる。

会社は，技能工を手塩にかけて育て上げることによって，会社全体でファミリーとしての一体感を醸成しつつ良質な施工を実現し，さらに自社での雇用を通して地域経済に貢献する－これが，フィロソフィーの意味であると思われた。従業員約2,700名の会社の現場技術者が，ケーブルカー駅の工事現場で，各技能工に温かいまなざしで気さくに声をかけていたのが，大変印象的であった。これは，ファミリーとフィロソフィーを象徴的に表すワンシーンであったと，今改めて思うのである。

冒頭で述べたように，日本の技能工にもスイスに優るとも劣らない崇高なフィロソフィーを持っている方がいる。また，ファミリーとしての一体感の醸成は，日本人が最も得意な領域である。建設業の魅力向上のためには，我が国ならではのファミリーとしての一体感とフィロソフィーを，業界全体で構築していくことが不可欠であると考えられる。

私たちは昨年12月，「定置式水平ジブクレーンの活用促進及び建設技能者の働きがい向上技術研究組合（JIBS：ジャイブス）」を設立した。欧州諸国で標準的に使用されている定置式水平ジブクレーンの調査研究・普及促進，このクレーンの利活用による多技能労働者育成・奨励の妥当性検証を通して，地方中小建設会社のビジネスモデル開発，並びに，技能労働者の働きがい向上方策を検討していきたいと考えている。

私たちが目指す試みはささやかなものであるが，このような試み・活動の波が全国に広がり，我が国ならではのファミリーとしての一体感とフィロソフィーの構築に向けた取り組みが，業界全体で展開されることを切に願い祈る次第である。